

巻頭言 「空の鳥を見る」

宇野 元

芦屋白橋から見上げる空はひろい。そしてじつにドラマチック。流れる雲。太陽の黄金の輝き。澄んだ青空。立原道造の詩が浮かびます。

いつまでも いつまでも
もしも 僕らが鳥だったなら
空の高くを 飛んでいよう
雲のあちらを あこがれながら

とても「詩的」だね。じっさい、ぼくらは鳥じゃない。それに、鳥も人間とおなじように厳しい現実の中に生きているんじゃないか。そうだね。立原じしん、「もしも」と書いている。しかしイエス様が語っているよ。「空の鳥をよく見なさい」と。まさに、厳しい現実のなかにあるぼくら人間にむけて。——うつつむいてばかりいなさんな。ほら、顔をあげてごらん。鳥が、なんと軽やかに空に浮かんでいることだろう、なんと自由に飛んでいることだろう、と。

カール・バルトがこういうことを言っています。神が人と共に作られる歴史は前進する。だから、私たちは止まり木に静止するものではなく、たえず前に向かって進む存在とされていると。空を飛ぶ鳥！ イエス・キリストに信頼を寄せる者に、すばらしいイメージが与えられています。

神が共に歩んでくださる私たちの人生、その出発点に、大きな肯定が与えられています。世界の創造者である神が、自ら創造された世界を肯定されました。そしてそれは、真剣な肯定であるゆえに、決して撤回されません。どのような異議申し立てがあろうとも。私たち人間の罪によっても。このことが確かな事実であることをイエス・キリストの復活が証ししています。はじめの「しかり」が再び、さらに明確に、力づよく、深く、私たちの疑いに打ち勝つものとして示されています。

信仰は、聖書の言葉によって羽ばたく翼を心に与えてくれます。人間は自分ができることに優る存在であると、私たちは信じることができます。その拠り所は、神の恵みです。神の恵みが無力な者に自由を授けてくれます。無力であるにもかかわらず、自由な者として生きることを可能にしてくれます。